鳴門教育大学研究紀要
第22巻　2007

戦後国語教科書に描かれた女性像

――「キュリー夫人」を中心にして――

幾　田　伸　司

（キーワード：キュリー夫人，国語教科書，伝記，女性像）

1　はじめに

国語教科書に時代や社会の規範的価値観が投影されていることは，すでに多くの論者が指摘している。こうした規範的価値観を検討しようとするとき，有効な手がかりとして考えられるのが，伝記をはじめとする，実在人物を題材とした教材である。国語教科書に登場する実在人物は，基本的には優れた業績を残した「偉人」である。それゆえ，その生き方・考え方は，一つの模範的モデルとして学習者に提示されている。教科書で取り上げられる人物には，規範的価値観を体現した人間像が示されているのである。

こうした規範的人間像は，男女によって異なるものが描かれているのではないか。社会が求める役割に性差があるなら，教科書が描く規範的人物像にも性差があることは十分考えられる。そこで本稿では，どのような女性像が規範的人物として教科書に描かれてきたかを，キュリー夫人を扱った教材を素材として検討したい。

キュリー夫人は，ヘレン・ケラー，ナイチンゲールとともに，戦後日本で最も親しまれてきた女性の一人であると言ってよいだろう。昭和13年刊行の『キュリー夫人伝』（エーヴ・キュリー）は，戦後初期のベストセラーであったし，現在にいたるまで，マンガも含めると百点をくだらないキュリー夫人伝が出版されている。

国語教科書においてもまた，キュリー夫人は頻繁に取り上げられてきた。戦後教科書に登場する女性としては，ヘレン・ケラー，ナイチンゲールを抑え，小・中学校ともに最も多くの教科書で採録された人物となっている。

そこで，本稿においてはキュリー夫人を取り上げ，教科書に採録された教材の中でどのような人物像が描かれているかを考察する。それを通して，教科書に現れる規範的女性像の一端についての検討を試みたい。

〈表１　戦後国語教科書に採録された「キュリー夫人」教材〉

		教　材　名	作　者	概　要
小学校	①	その母その子	（無署名）	父・娘を含むキュリー家の逸話
	②	キュリー夫人	（無署名）	エーヴの回想（逸話）
	③	マリーの勉強～キュリー夫人	（無署名）	伝記（パリ遊学まで）
	④	キュリー夫人	野村純三	伝記（生涯記）
	⑤	キュリー夫人	新川和江	伝記（生涯記）
中学校	①	キュリー夫人伝（A）	E.キュリー	伝記（夫の死とソルボンヌでの初講義）
	②	キュリー夫人伝（B）	E.キュリー	伝記（ラジウムの単離）
	③	希望の門出	水島あやめ	伝記（姉の遊学から自身のパリ遊学まで）
	④	倉庫住まいの四年間	（無署名）	伝記（ラジウムの単離）
	⑤	キュリー夫人	清閑寺健	伝記（姉の遊学からノーベル化学賞まで）
	⑥	キュリー夫人	宮津博	戯曲（ラジウムの発見・単離）
	⑦	マリー＝キュリー	大野三郎	伝記（生涯記）
	⑧	ラジウムの発見者	菅井準一	伝記（パリ遊学以降）
	⑨	科学に生きる女性	山中峯太郎	伝記（夫の死以降）
	⑩	パリへ―『キュリー夫人自伝』より	M.キュリー	自伝（パリ遊学まで）
	⑪	キュリー夫人	湯浅年子	随想
	⑫	すぐれた婦人像	沼田睦子（生徒作品）	読書感想文
	⑬	ある日の読書会	（無署名）	読書会での発言
	⑭	人間の生き方について考えよう―読書感想文を書く	（無署名）	読書感想文

2　小・中学校国語教科書におけるキュリー夫人教材の採録状況

キュリー夫人を扱った教材は，小学校教科書では４社５編，中学校では12社14編が採録されている。教材のスタイルは，自伝，他伝，劇脚本，随想，伝記的事実をふまえた読書感想文など，多岐に渡っている。これらの教材を一覧化したものが〈表１〉である*[1]。また，〈表２〉では，これらの教材の採録状況を示した。

小学校教材としての初出は昭和26年度で，以後５編が延べ23回採録された。延べ23回の採録は，平成13年度までに刊行された小学校教科書に採られた全人物中４位にあたり，女性を扱った教材の約４分の１がキュリー夫人教材であったことになる。昭和20年代の採録は３編で，そのうち小①②の２編は，いくつかの逸話を取り出して提示し，夫人の美徳を示すという型の教材であった。昭和30年代での新規採録はなく，昭和43年度から，夫人の生涯全般を扱った伝記教材が２編採録されている。昭和43年度以降は，教科書の刊行数減少にともなって，複数の教科書が採録する人物もファーブル，エジソン，福沢諭吉などに限られた。そうした中でも重複採録があるキュリー夫人は，特に昭和40年代以降で高い評価を得ていた人物であったと言えよう。キュリー夫人教材で特徴的なのは，昭和26年度から平成３年度まで，41年間にわたって採録が継続した点である。このように長期にわたって採録された人物は少なく，小学校教科書に採録された全人物の中で，ファーブル（S26・S30－H11，延べ46年），宮沢賢治（S27－42・S46－60・H１－13，延べ44年）に次ぐものであった。こうした長期採録は，時代の影響を受けない，普遍的な規範的人物像をキュリー夫人像が提示していることを示唆するとともに，各時代の要請に合わせて夫人の人物像の造形が変化している可

〈表２　戦後教科書における「キュリー夫人」教材の採録状況〉

		教　材　名	作　者	出版社	延採録数*	期　間
小学校	①	その母その子	（無署名）	光村図書	3	S26－35
	②	キューリー夫人	（無署名）	教育出版	4	S27－35
	③	マリーの勉強～キュリー夫人	（無署名）	大阪書籍	4	S29－45
	④	キュリー夫人	野村純三	学校図書	4	S43－54
	⑤	キュリー夫人	新川和江	教育出版	8	S43－H３
中学校	①	キュリー夫人伝（A） キュリー夫人	エーヴ・キュリー	教育図書	2	S25－29
	②	キュリー夫人伝（B） ラジウムの誕生 キュリー夫人 キュリー夫人 キュリー夫人伝 キュリー夫人	エーヴ・キュリー	 東京書籍 大修館 池田 三省堂 大日本	 6 4 1 3 1	 S26－43 S27－40 S29－34 S32－40 S37－40
	③	希望の門出 希望の門出 門出	水島あやめ	 二葉 中央図書	 3 1	 S25－33 S33
	④	倉庫住まいの四年間	（無署名）	学校図書	2	S26－28
	⑤	キュリー夫人	清閑寺健	教育図書	2	S28－36
	⑥	キュリー夫人	宮津博	学校図書	4	S28－36
	⑦	マリー＝キュリー	大野三郎	二葉	1	S30－36
	⑧	ラジウムの発見者 キュリー夫人伝 ラジウムの発見者	菅井準一	 開隆堂 三省堂	 1 2	 S34－36 S37－43
	⑨	科学に生きる女性	山中峯太郎	教図研	1	S37－43
	⑩	パリへ―『キュリー夫人伝』より	マリー・キュリー	筑摩書房	2	S41－46
	⑪	キューリー夫人	湯浅年子	大修館	1	S25－27
	⑫	ある日の読書会	（無署名）	三省堂	4	S27－36
	⑬	すぐれた婦人像	沼田睦子（生徒作品）	学校図書	1	S41－43
	⑭	人間の生き方について考えよう ―読書感想文を書く	（無署名）	三省堂	1	S44－46

＊「延採録数」は，当該教材を採録した教科書数（改訂版も含む）を示す。

能性も示している。

中学校教材としての初出は昭和25年度で，以後，昭和46年度までに14編（うち，伝記的教材は10編）が延べ43回採録された。中⑪～⑭は伝記的教材ではないが，夫人の生涯や言動に触れ，その生き方や思想を顕彰する記述がなされている。教材の採録期間は小学校に比べると短いが，この期間での採録はきわめて多く，杉田玄白（延べ45回），福沢諭吉（延べ43回）とともに，この期間の中学校教科書で最も多く採られた人物の一人であった。また，女性としては際だって多く，女性を扱った教材の30％がキュリー夫人教材である。個々の教材についてみると，ラジウム単離過程の苦労を描いた中②を５社の教科書が採っており，最も頻度が高い。このほか，中④⑥もこの場面を含むラジウムの発見に関わるエピソードを特化して扱っており，ラジウム単離を重視する比重が小学校よりも高い。

総体的に見て，キュリー夫人教材は戦後初期から昭和40年代中盤までは中学校を中心に，以降，平成３年までは小学校を中心にした形で採録されている。校種に異動はあるものの，戦後国語教科書の中で安定して高く評価され続けた人物であったと言える。

3　教科書に描かれたキュリー夫人の人物像

キュリー夫人（マリア・スクロドフスカ）は，1867年，両親ともに教育者という家庭環境のもと，５人兄妹の末子としてポーランドで生まれた。当時ポーランドはロシアの統治下にあり，母国語さえ使えないという状況にあった。夫人は生涯にわたって強い愛国心を持ち続けていたが，それはこうした環境が強く影響している。幼少時から勉強が好きで成績も優秀であったが，父の失職，姉・母との死別などの不幸が続き，経済的には恵まれなかった。女学校卒業後，姉ブローニャのパリ留学を支援するために住み込みなどの家庭教師を行った後，1891年に念願であったパリのソルボンヌ大に入学した。貧窮生活に耐えながら勉学を続け，優秀な成績で物理学・数学の学士試験に合格する。そうした生活の中でピエール・キュリーと出会い，1895年に結婚。博士論文のテーマに放射能の研究を選び，1898年に瀝青ウラン鉱（ピッチブレンド）に含まれる放射性元素の存在を予想し，発表した。しかし，化学者たちからその証明を求められ，以後四年間，劣悪な環境下でピエールとともにラジウムの単離をめざし，1902年に成功する。翌年，ノーベル物理学賞を受賞。その後，夫妻ともにソルボンヌ大に奉職するが，1906年にピエールが事故で急死する。絶望に沈むが，夫の遺志を受けて研究の継続を決意。夫の後任としてソルボンヌ大の教授となり，研究と教育に没頭する。1910年に金属ラジウムの単離に成功し，翌年ノーベル化学賞を受賞。第一次大戦中には，X 線機器を積んだ自動車で自ら戦場に出向き，傷兵看護にあたった。大戦後も研究にいそしんだが，1934年，放射線の影響による悪性貧血症のために死去。

以上が，キュリー夫人の生涯の概略である。この生涯を描いた伝記では，どのような人物像が造型されうるのだろうか。阪本一郎は，キュリー夫人の伝記で示される徳目的要素として，中学年向け伝記では「真理，探求心，女らしさ，家庭愛，希望」，高学年・中学生向け伝記では「忍耐，探求心，愛国心，努力」を挙げている[*2]。

また，随想，伝記を読んでの読書会の発言や読書感想文などの体裁で示された教材では，キュリー夫人の人物像について次のように記述されている。

> この精神の集中された熱心な研究態度から，はじめてあの超微量のラジウムの発見がなされたのである。キューリー夫人のこの生涯変わらなかったまじめさについて考える時，私はいつも心の引きしまる思いがある。（中略）
>
> キューリー夫人に見るもう一つの，そして大きな特徴は，愛情の豊かさ，強さである。幼いころの父に対し，きょうだいに対し，さらに祖国に対する愛情，後にいたって夫に対し，子供に対し，さらに研究に対する愛情の深さ，強さを見るとき，ここにもまた彼女のすぐれているゆえんを知るのである。
>
> （中⑪「キューリー夫人」）

> 私はこの本を読みながら，何度となく目がしらが熱くなりました。ほんとにマリーは，苦労と忍耐と努力とによってみがき出された天才であります。肉親や祖国を愛するために，まったく自分のことを考えず，人のために尽くした愛の人であります。どんな苦しい生活の中にいても，ひたすら学問に励み，研究に心を打ちこんで，熱心に真理を求めた人であります。　（中⑫「ある日の読書会」）

> 偉大な精神力，力強い忍耐力，それにまして感服させられるのは，自己完成とか他人への奉仕とかに対する

当然の報酬を，実に謙虚な態度で受けていることである。そして，最後まで女性としての慎みを忘れず，なき夫をたたえ続けたマリー＝キュリーは，「すぐれた婦人像」として，わたしの心に強く残った。
（中⑬「すぐれた婦人像」）

「前書き」の「貧しい家，みじめな国に生まれたひとりの女性が，いくつもの障害を乗りこえて，美しい人生を生きぬき，人類にとって未知のとびらを開いた。」が，私の心をさそった。
読んでみると，苦しみと戦いながら，ラジウムを発見し，ノーベル賞を二回も受けた夫人の，力強い努力の一生が書いてあった。（中⑭「人間の生き方について考えよう」）

これらの教材の記述で第一に強調されているのは，「まじめさ」「苦労と忍耐と努力」「偉大な精神力，力強い忍耐力」といった表現で表象される人間像である。強い信念を持ち，忍耐強く努力を重ねることによって，ラジウムの発見という偉業を成し遂げた人物というのが，一般的なキュリー夫人理解であろう。そのほかには，「愛情の豊かさ，深さ」「肉親や祖国を愛する」「人のために尽くした」「ひたすら学問に励み」「謙虚な態度」「女性としての慎み」「夫をたたえ続けた」なども，夫人の人物像を示す要素として指摘することができる。
これらをもとに，本稿では，キュリー夫人の人物像として次のような要素を設定した。

1　困難を，強い信念，忍耐，努力によって克服した努力の人　：「努力」
2　自分のことよりも家族の思いや幸せを優先して考え，行動する人　：「家族愛」
3　自分の利益よりも，他者や社会の利益を考えた人　：「利他心」
4　勉学を志し，夫の死を乗りこえて科学の進歩に尽くした人　：「学究・向学心」
5　祖国に対する強い愛国心を抱き続けた人　：「愛国心」
6　夫と強い絆で結ばれ，協力して事をなした人　：「夫婦の協力」
7　夫を敬愛し，その死後も夫への敬意と愛情を抱き続けた妻　：「夫への敬愛」
8　二人の娘を立派に育て上げたよき母　：「よき母」

以下，それぞれの要素が教材の中でどのように記述されているかを検討する。

3．1　努力

強い信念を持ち，忍耐と努力によって困難を克服した人物というものが，最も典型的なキュリー夫人の人物理解である。教科書教材でも，パリ遊学中の学生生活やラジウム単離過程を描くエピソードなどの中で，そうした人物像が提示されている。

学生時代，火の気一つない，七階の屋根うらの下宿で，夜中の二時，三時まで，ガチガチと歯をならし，がたがたとかたをふるわせながら，かじかんだ手で，ノートの上にペンを走らせていたという，しんぼう強い母。
（小②「キューリー夫人」）

この仕事の分化において，マリーは「男の仕事」を選んだ。力仕事をやったのである。倉庫の屋根の下で，夫は困難な実験に没頭している。中庭では，例のほこりといろいろな酸のしみでよごれたうわっぱりを着て，髪を風になびかせ，目やのどをさす煙に包まれながら，マリーは，彼女ひとりで，なんのことはない，工場の役目を果たしているのである。（中②「キュリー夫人伝（B）」）

しかし夫人はラジウム発見に全生命をうちこんでいる。ラジウムそのものを目の前に見ないではいられない。それがどんな形をしているか，どんな色をしているか，とにかく実物を見るまでは何年でも続けると決心しているのだ。夫人は夫ピエールにくらべると，何といっても年は若く，知識も経験も浅い。実験の途中で，どうしてもわからないことに出会うと，いそいで参考書をひらいて，何か書いていないかとさがしまわった。夫人は，ひたすら信念のもとにつきすすんだ。すぐれた学者であるピエールでさえ投げ出してしまいたくなった実験を，女性特有のねばりづよさでがんばりぬいた。（中④「倉庫住まいの四年間」）

困窮に耐え，「男の仕事」を選び，ピエールでさえ投げ出しかけた困難な作業を，固い信念と努力でやり抜いた人物としてキュリー夫人は描かれる。こうした一意専心型の努力のあり方は，時には「女性特有のねばりづよさ」という女性の特質として一般化される場合もある*[3]。

このように，恵まれない環境のもと，意志の力と努力によって主人公が困難を乗り越えていくというのは，男女を問わず，伝記で頻繁に描かれる構図でもある。キュリー夫人の生涯も同様の構図を持っており，教科書もそうした構図に沿って「努力」の重要性を示す人物像が造型され，強調されている。

3．2　家族愛

キュリー夫人には，自分自身の夢や幸福よりも家族の願いや思いを優先する言動がしばしば現れる。こうした夫人の言動によって強調して提示されるのは，家族に対する彼女の愛情の深さである。そうした家族への愛情を端的に示しているは，姉のパリ留学のために自分が家庭教師をして学資を提供すると提案したり，父のために遊学を断念しようとしたりするくだりである。

> 「まあ，おねえさまったら，わけのわからないことはいいっこなしよ。おねえさまははたちで，あたしはまだ十七でしょう。おねえさまはもう長いこと待っていらしったのに，あたしはまだ先が長いんですもの。せめて――せめて，そうでもしてご恩返しをしなくちゃ……」
> 「マーニャ，かわいいマーニャ――」
> ブローニャは，感動して，しみじみと涙をこぼした。マーニャのやさしい気持ちが，あたたかい肉親愛が，湯のように全身にしみわたった。（中③「希望の門出」）

> こうして五年。ある日とうとう，パリの姉から手紙が来た。ブローニャは，医師の試験に合格し，同じ医師であるポーランド人と結こんし，マリヤのためにへやまで用意して待っているということであった。
> けれどもどうしたことだろう。おどり上がって喜ぶどころか，マリヤの心は暗くしずんでいくばかりだった。ワルシャワにいる年老いた父親のことを思うと，パリへ行く決心がつきかねた。いく日も思いなやんだ末に，マリヤは，姉に断りの手紙を書いた。（小⑤「キュリー夫人」）

パリ遊学は夫人の念願であるが，彼女は自身の夢よりも姉や父の思いを優先する。こうした言動は，夫人の家族愛，優しさを象徴するものとして，多くの教材では肯定的にとらえられ，描写されている。一方で，年長の家族のために自己を犠牲にするという行為は，前近代的な自己犠牲と結びつきかねない危険性も持っている。中③の記述でも，敬語の使用や「ご恩返し」という語彙などに，そうしたニュアンスが感じられる。家族を愛し，家族のために尽くすという心性は，学習者に示される徳目としては意義を持つものである。一方で，自己犠牲を過度に強調する危険性もあることには留意しておく必要がある。

3．3　利他心

自分の利益よりも他者の思いや社会の利益を優先する利他心も，キュリー夫人の言動に頻繁に現れる心性である。前項で取り上げた家族愛を提示する夫人の言動は，同時に彼女の利他心を示すものとしてもとらえられる。

こうした夫人の利他的な言動は，さらに一般化され，人類愛と結びつけられる場合もある。

> これは，母のフランスに対する愛情だけではなく，もっと広く，人類の幸福を願う心の現われであった。ラジュウムを発見したときにも，じぶんたちで特許権を取って，アメリカの商人に売れば，ばく大な富を積むこともできたにちがいない。しかし，父母は，あの，苦しかった四年間の実験をすっかり公開して，ラジュウムを取り出す方法を人類共有のものとした。それと同じ精神である。（小②「キューリー夫人」）

ここでは，ラジウム製造の特許権を放棄するというキュリー夫妻の行動が「人類の幸福を願う心の現われ」として一般化され，まとめられている。学習者に提示される規範として，自己の利益を放棄してでも他人や社会のために尽くすという人物像を否定的に描くことはできない。キュリー夫人においても，そうした彼女の利他的言動に美徳が見いだされている。

3．4　学究・向学心

勉学や研究に打ちこむ姿も，キュリー夫人の伝記で強調される人物像の一つである。こうした向学心や学究の姿勢は，第一にはパリ遊学を志し，ソルボンヌ入学後には勉学に励む様子として，第二には研究生活を選び，夫ピエールとともにラジウムの研究に没頭したこととして提示される。

> 一八九一年，マリーは，ソルボンヌ大学に入学した。ここでもマリーは，貧しさと戦わなければならなかった。しかし，どんな貧ぼうも苦労も，今のマリーには苦にならなかった。今こそ，すきな勉強に思うぞんぶんうちこむことができるのである。夜ねる時間もおしみ，時には，食事もぬかして，一心に勉強した。
>
> （小③「マリーの勉強」）

> 胸をときめかせながら，マリーは，パリのソルボンヌ大学の門をくぐった。各国から集まってきた学生が，むずかしい講義を聞いている広い教室。マリーも，その中に交じって，一言も聞き落とすまい，一字も書き落とすまいと，熱心に耳をかたむけ，いっしょうけんめいノートをとった。夜は図書館に行って，閉館時刻の午後十時まで机に向かった。家に帰ると，ランプの光で，夜中まで勉強を続けた。
>
> （小④「キュリー夫人」）

「すきな勉強に思うぞんぶんうちこむことができる」「胸をときめかせながら」といった記述で強調されるように，キュリー夫人の場合，学ぶこと自体が楽しくてしかたがないものとして提示される。つまり，学ぶこと自体が彼女にとっての目的となっているのである。

こうした向学心あふれる人物像は，ラジウム単離過程においても，研究自体に幸福を見いだす人物として提示されている。

> 仕事を続けていく幾日が，やがて幾月になり，幾年になった。ピエールとマリーは勇気を失わない。かれらに抵抗するこの物質，それがふたりを魅了した。愛情と共通の知的情熱によって結び合わされたふたりは，そまつなバラックの中で，ふたりが，夫も妻も，そのために生まれてきたような「自然にそむいた」生活を送った。マリーはのちに次のように書いている。
>
> > われわれは，この時代，思いもうけぬ発見のおかげでわれわれの前に開けたこの新しい分野に，まったく没頭しきっていた。われわれの仕事の条件の困難にもかかわらず，われわれはたいへん幸福に感じていた。われわれの日々は実験室で流れた。われわれの実にみすぼらしい倉庫の中を，大いなる安息が領していた。時に何かの実験を見張りながら，現在と未来の仕事を語りつつ，へやの中を縦横に歩き回ることがあった。寒くなると，暖炉のかたわらで取る一わんの熱い茶が，われわれを力づけてくれた，われわれは夢みごこちで，ただ一つの関心事の中で生きていた。　（中②「キュリー夫人伝（B）」）

たしかに，勉学に励むこと，研究すること自体に幸福感を見いだせるような学びの姿が，学習者に共感を持ってとらえられるかどうかは疑問の余地がある。しかし，勉強が好きで，寝食をおしんで勉学に励む人物，つまり勉強することを無条件に全肯定する人物は，規範としてはあり得る人物像であろう。二宮金次郎，福沢諭吉など，勉強好きな人物を取り上げ，熱心に勉強に励む姿を提示して学究心を説く教材は少なくない。キュリー夫人もまた，そうした学究・向学心に満ちた，学ぶことの楽しさを強調する人物として描かれている。

3．5　愛国心

キュリー夫人の人物像を特徴づける要素の一つに愛国心がある。ロシア占領下のポーランドで生まれ育った夫人は，その生涯にわたって祖国にする強い愛国心を抱き続けていた。それゆえ，教材でも彼女の愛国心に関する記述はしばしば登場する。彼女の愛国心は，最も穏やかな形としては，発見した新元素を祖国にちなんでポロニウムと命名した，という事実として提示される。一方で，少なくない教材が夫人の言動を通して，さらに積極的に夫人の「愛国心」について記述を行っている。

彼女の愛国心は，他国の圧政下におかれ，母語の使用さえ抑圧されていたという状況下における幼少時の経験を通して形成されたものである。こうした幼少時の経験と愛国心の形成は，次のように記述される。

そのころ，ポーランドは，ロシアの支配下にあって，自国語も公式に使えないみじめな状態にあった。ロシアの役人が前ぶれもなしにふみこんでくる教室で，マリヤたちは，こっそり禁を犯してポーランド語を習い，ポーランドの歴史を学んだ。
「大きくなったら，この国のためにつくそう。りっぱなポーランド人になろう。」
マリヤは，いつも，自分の心にそう言い聞かせた。　（小⑤「キュリー夫人」）

ここでは，「自国語も公式に使えないみじめな状態」「ロシアの役人が前ぶれもなしにふみこんでくる教室」という異常な状況を提示した上で，そこから「この国のためにつくそう」という決意が生じたことが示されている。夫人の愛国心は，こうした状況に由来する必然性を持ったものとして記述されているのである。このように，夫人の幼少期に触れ，その由来と切実さを示して愛国心を記述した教材は，小⑤・中⑩の２編のみであった。一方，いくつかの教材では，幼少期の経験との関連が示されず，結果として，理念的に「祖国のために尽くそう」と考える人物として夫人が描かれている。

そのころ，ポーランドは，ロシアの支配下にあった。かねてから，祖国ポーランドの独立を願っていたマリーは，やがては，そのポーランドをせ負って立たなければならない子どもたちが，こんなことではいけないと考えた。この子どもたちに，学問への目を開いてやり，ポーランドのために働く心を植えつけてやりたいと，マリーは考えた。　（小③「マリーの勉強」）

「わたしのこの『方法』は，おとうさまだって，きっと賛成してくださってよ。わたし，すぐ実行にかかるわ。ふたりでかわりばんこに助けあって，勉強して，将来は何かきっと人のためになること，お国のためになることをしましょうね。」　（中③「希望の門出」）

彼女は自分の未来を空想する。―― それは，学業成って故郷に帰り，老いたる父のそばで，つつましい教師として，祖国ポーランドのために奉仕する姿だ。　（中③「希望の門出」）

小③では，「かねてから，祖国ポーランドの独立を願っていた」キュリー夫人が子どもたちに「ポーランドのために働く心を植えつけてやりたい」と考える。祖国独立への思いの根拠は「かねてから」とまとめられてしまい，彼女が祖国独立を願うようになった心理的経緯は示されていない。また，中③では，キュリー夫人は「祖国ポーランドのために奉仕する」ことに未来の目的を見いだす少女として描かれている。これらの教材では，いずれも幼少時の経験が捨象されている。つまり，経験に裏打ちされた切実さをともなわないまま夫人の愛国心が取り上げられ，結果的に，「国のために尽くす」という抽象的な国家愛に転化しかねない記述のしかたとなっているのである。
教科書における愛国心の記述は，きわめてデリケートな問題である。その中で，キュリー夫人は利他心，無私の学究の徒といった他の規範と共存する形でその愛国心を記述でき，狭隘な国家主義に陥らない健全な形で愛国心を示すことができる人物の一人であった。ただし，その記述のあり方によっては，夫人の愛国心が必然性を持たない理念型として提示される可能性もあったことには留意する必要がある。

３．６　夫婦の協力

キュリー夫人の生涯において，夫ピエールの存在はきわめて重要である。夫人にとって，ピエールは最愛の夫であると同時に，研究上の師であり，最良の研究パートナーでもあった。キュリー夫妻のように，男女が対等の立場で互いを尊重し，協力し合うという関係は，女性を主人公とするキュリー夫人教材ににおいて特徴的な要素である。こうした両者の関係は，二人が結婚しているという事実をもって，夫婦の協力として取り上げられることとなる。

しかも，意味深いのは，キューリー夫人の場合も，その子イレーヌの場合も，ともに夫との協力によって，この大発見をなしとげたということである。　（小①「その母その子」）

もし夫ピエールの一心同体ともいうべき協力がなかったら，夫人の仕事は成功しなかったろう。
（中④「倉庫住まいの四年間」）

たくさんの数式や図面でいっぱいになっている研究ノートのどのページにもふたりの筆が入りまじっていた。そのときにはいつもふたりの名が並んでいた。
「わたしたちが発見した。」
「わたしたちが観察した。」
これがふたりのしきたりになった。そしてまた，おたがいの仕事の分担をはっきりさせたいときには，こんなふうに書いた。
「わたしたちのひとりは……。」　（中⑧「ラジウムの発見者（キュリー夫人伝）」

夫婦の協力を特に取り立てて顕彰する小①のような記述の他にも，中④⑧をはじめとして二人の協力関係を描く教材は少なくない。ラジウムの単離は夫妻の共同作業であり，そこでのピエールの役割と貢献を記述しないわけにはいかないからである。
妻が夫を支えるという形の夫婦関係は，男性を主人公とする他の伝記にも見いだすことができる。しかし夫妻が同等の役割を果たしたことによって示される「協力する夫婦」の姿を，男性を主人公とする他の教材から見いだすことは難しい。こうした夫婦像は，キュリー夫人教材で示される特徴の一つとして挙げることができる。

3．7　夫への敬愛

「夫婦の協力」は，研究者としての夫妻の関係から描き出されたキュリー夫人の人物像である。一方，妻として彼女が持ち続けた夫に対する敬愛の情もまた，肯定的に描かれるキュリー夫人の人物像の一つである。

夫ののこしていった言葉をそのまま受けとって，夫人の講義の最初のことばとしたのである。
なんという夫への信頼であろう。なんという敬愛，なんというつつましさであろう。
（小①「その母その子」）

「物理学の方で達成されました進歩を考えてみますとき,」というこの氷のようなことばのうちに，もしかするとどんなに多くの悲痛なものが含まれていることだろう。目に涙がわき，顔を伝わった。
（中①「キュリー夫人伝 A」）

これらは，ピエールの死後，その後任としてソルボンヌ大の講義を初めて行った際の様子を描いた記述である。このとき，彼女は，通例であった大学への謝辞も前任者への賛辞も行わず，夫の最後の講義の最後の言葉をそのまま引用して講義を始めた。夫への敬愛の情を象徴するエピソードとして，いくつかの教材が取り上げている。
また，ノーベル化学賞を受賞した際の講演の冒頭で，夫を立てる発言を行ったことを記述する教材もある。

マリーは授賞式後の講演会では，
「わたしがきょうあたえられました栄誉は，その土台をなすものが，夫のピエール＝キュリーとの共同研究によって築かれたものでありますから，わたしへのお誉めのことばは，そのままピエール＝キュリーへの賛辞であると考えます。」
と，ピエールにその功績を譲ろうとして，いっそう参会の人々を感激させた。　（中⑤「キュリー夫人」）

授賞式における公開講演の初めに，マリーはこう述べた。
「講演の主題に取りかかります前に，私は，ラジウムの発見とポロニウムの発見が私と共同でピエル＝キュリーによってなされたことを，思いおこしたいと存じます。（中略）私は，自分が受けます高い名誉の最初のきっかけが，この共同研究の中にありますことから，この名誉はピエル＝キュリーの名をたたえることを意味すると了解するのが，科学学士院の御趣旨を正しく理解することだと信じます。」　（中⑧「ラジウムの発見者」）

これらの記述もまた，ピエールに対する夫人の敬愛の情を強調し，賛美するものである。ピエールに寄せる夫人の信頼と愛情は深い。そうした夫人の愛情の深さを取り上げることで，妻として夫を深く敬愛する一人の女性としてもキュリー夫人像は造型されている。

3．8　よき母

キュリー夫人は，優れた科学者であっただけでなく，二人の娘を育てあげたよき母でもあった。そうした家庭人としてのキュリー夫人像も，教科書には描かれている。

> そんなやさきに，赤んぼうが生まれた。生活はますますいそがしくなったが，そんなことで研究を中断してしまうようなマリーではなかった。家事のために研究時間をけずらなくても済むように，朝，火にかけておけば外出中にひとりでにできあがる料理法まで考案した。（小⑤「キュリー夫人」）

> そのころには，姉のイレーヌが，もう生まれていたので，母は，おさない子どものせわもしなければならなかったであろう。物理学の公式や計算とともに，姉の体重のふえていくようすや，にゅう歯のはえそろっていくようすなどが，いちいちたんねんに書きとめられてあった。（小②「キューリー夫人」）

> このように，かぎりなく人類を愛し，祖国を愛した母は，また，家庭をこのうえもなく愛した。父のなくなったあと，ふたりきりのきょうだいを，これまでに育てあげてくれた母。（中略）姉のイレーヌが物理学者となり，私がピアニストになることのできたのも，みんなこの母の力である。（小②「キューリー夫人」）

> その後，二人はまったく一体となって研究した。しかも，キュリー夫人は，一方ではふつうの妻と同じように料理をしたり，子供のせわをも熱心にしたりした。（中④「倉庫住まいの四年間」）

> おとうさんの生前の仕事が学会と人類のためになったからといって，ふたりの娘が政府の年金に助けられて大きくなるのは，ふたりにとって独立の気持ちを弱めることになりはしないか。自分のことは自分でする。母のマリーは自分も少女時代からこの気持ちで切り抜けてきた。ふたりの娘イレーヌとエープも自分の力で生きてゆく人間になるように母は第一に望み，この気持ちによってふたりを育てていった。
>
> （中⑨「科学に生きる女性」）

よき妻，よき母であることは，女性に付与される典型的な役割であろう。キュリー夫人は，科学者であると同時に，母として子どもたちを養育することにも心を砕いている。研究者と母という二つの役割を全うした人物であったこともまた，教科書が強調して描いたキュリー夫人像の一つである。

4　教科書に採録されたエピソード

前節で検討したように，教科書では種々のキュリー夫人像が造型されている。だが，すべての教材がこうした人物像を網羅的に提示しているわけではない。特定のエピソードを特化して取り上げることが多い教科書教材の場合，伝記中のどのエピソードを取り上げるかによって強調される徳目が異なり，異なった人物像が造型されることになる。そこで本節では，キュリー夫人の生涯にわたるエピソードの中で，各教材がどのエピソードを採録しているかを検討する。

まず，夫人の生涯を「少女時代」「家庭教師時代」「パリ留学の時代」「結婚からラジウムまで」「ピエールの死まで」「第一次世界大戦まで」「大戦中のこと」「死まで」の７期に分けたうえで，さらにそれぞれを細分化して52のエピソードを設定した[*4]。各教材について，これらのエピソードの取り上げられ方を示したものが，〈表３〉である。表中の○は詳述されているエピソード，△は記述はあるが事実の報告にすぎないもの，空欄はまったく触れられていないものである。

〈表3 「キュリー夫人」教材で採録されたエピソード〉

	小学校					中学校													
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8	8'	9	10	11	12	13	14
Ⅰ 少女時代																				
1 家庭環境	○		○	△	○							○				△		△		
2 占領下というポーランドの状況			○		○							○	○			○				○
3 記憶力・集中力のすぐれていたこと				○																
4 父の副視学官免職					△							△	△	△						△
5 姉ゾーシャの死												△				△				
6 ひそかに国語・国史を習ったこと					○											○				
7 母の死			△	○	△							△	△	△		○		△		
8 友人の兄,反逆者として死刑に																				
9 一年間の休暇																△				
10 翼の大学（移動大学）				△												○				
Ⅱ 家庭教師時代																				
1 ブローニャへの提案			△		○			○				○				△		○		
2 ブローニャへの仕送り		○		○	△					○								△		△
3 B家での経験			△														△			
4 Z家で村の子どもたちに教える			○		△					△		△				○	△			
5 Z家の長男との恋愛・結婚問題																				
6 ブローニャの結婚とパリへの誘い			△	○	○			○		○										
7 父を思ってパリ遊学を断念する			○		○															
8 農工業博物館で実験をする			○		○											○				
Ⅲ パリ留学時代																				
1 ソルボンヌ大学入学			○	○	○			○		△		△	○	○		△		△		
2 学生生活		○	○	○	○		*			○		○	○	○		○		○	△	
3 物理学士試験,第一位で合格			△	△	△					○			△	△						
4 ピエール・キュリーと知り合う				○	○							△								
5 数学士試験，第二位で合格			△	△									△	△						
6 ポーランドかパリか					○												△			
Ⅳ 結婚からラジウム発見まで																				
1 結婚			△	△	△					△		△	○	○			△			
2 中等教員選抜試験に合格												△								
3 イレーヌ誕生				△	△							△								
4 ポロニウムの発見と命名			○	○	○					○			○	○						
5 ラジウムの発見			○	○	○					○	○		○	○						
6 マリーの研究に対するピエールの寄与				○	○		○		○				○	○						
Ⅴ ピエールの死まで																				
1 夫妻とも教師になる									△				△	△						
2 ラジウム塩を単離するまでの苦労		○		○	○		○		○		○	△	○	○			△		△	○
3 ラジウム特許権のこと		○			○															
4 博士号をとる			△	△	△															
5 ノーベル物理学賞受賞	△	△	△	△	△								△	△				△	△	
6 ピエールがソルボンヌ大教授となる				△								△	○	○						
7 次女エーブの誕生				△																
8 ピエールの死とマリーの絶望		△		△	○	○						○	△	△	○		△		△	△

	小学校					中学校													
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8	8’	9	10	11	12	13	14
Ⅵ　第一次世界大戦まで																				
1　研究の継続を決意する		△		○	○	○						△	○	○						
2　ソルボンヌ大学の教授となり初講義	○			○		○							△	△	○					△
3　ソルボンヌの教授たちと組合授業																				
4　ソルボンヌ大学教授												△								
5　ドクトル・キュリーの死																				
6　金属ラジウムの単離			△	△																
7　ノーベル化学賞受賞	△		△	△	△					○			△	○	△					
8　ラジウム研究所,キュリー館設立				△	△							△	△							
Ⅶ　第一次大戦中のこと																				
1　戦地で傷病兵の治療に当たる		○		○	△							○	○							
Ⅷ　死まで																				
1　ラジウム基金とアメリカ旅行				○	○							△								
2　科学学士院会員となる																				
3　知的協力委員会での仕事																				
4　ワルソーにラジウム研究所開く		△																		
5　死		○	△	○	○							○	○		○		△			△

（注）中⑧については，教材で若干の記述の差があるため，開隆堂版を８，三省堂版を8’として区別した。
中②の「＊」は，池田版にのみ学生生活についての記述がある。

「少女時代」から「家庭教師時代」では，才能と愛国心にあふれる少女が，パリで進んだ勉強をしたいという夢を持ちつつ，家族のために自らの夢を抑え，勉強と仕事に励んだことが示される。教材における採録状況を見ると，「少女時代」についての記述量は全般的に少ない。Ⅰ－１・２は状況説明に近いため，これを除けば，具体的なエピソードをふまえて詳細に記述されているのは中⑩の自伝のみである。特に昭和20年代に採録された中学校教材では，少女時代にまったく触れていない。また，生涯記である小④⑤・中⑦においても，少女時代のエピソードは事実提示にとどまっているものが多い。夫人の人格や愛国心の形成において少女時代の経験が持つ意味は大きいが，教材では総体的に軽い扱いであった。「家庭教師時代」のエピソードは，小学校では多く，中学校では少ない。これは，中学校教材が，相対的に夫人のパリ遊学以降に重点を置いていることの反映であろう。この時期のエピソードでは，家族愛や利他心（Ⅱ－１・２・７），愛国心（Ⅱ－４），学究心（Ⅱ－８）など，努力以外の規範も強調されている。

「パリ留学の時代」では，貧しい環境の下，勉学に精進する夫人の姿が描かれる。この時期のエピソードは，小・中ともに多くの教材が取り上げており，特に貧窮の中で勉学に励む姿を描く「Ⅲ－２学生生活」の記述は，夫人の「努力」を示す典型的なエピソードとして，最も多くの教材が扱っている。

「結婚からラジウムまで」「ピエールの死まで」では，劣悪な環境下，夫妻で協力してついにラジウム塩を単離するまでの苦労が中心になる。特にポロニウム・ラジウムの発見からラジウム単離までは，Ⅲ－２と同様，努力するキュリー夫人像を典型的に描き出しており，多くの教材が取り上げたエピソードであった。一方，イレーヌの誕生とその養育の様子など，家庭人としての夫人像を描いたエピソードの記述は相対的に少ない。また，ラジウムの単離以後の記述は，ピエールの死を除けば軽い。

ピエールの死以降のエピソードについての教材の記述は多くない。その中で，ソルボンヌ大での初講義，ノーベル化学賞受賞時の夫をたたえる講演，第一次大戦中の看護活動，アメリカの女性記者が提案した夫人にラジウムを送る運動については，いくつかの教材が触れている。しかし，そのほかは，まったく触れられないか，事実の記述として触れられる程度のものがほとんどである。また，やはり戦後初期の中学校教材での記述はほとんど見られない。

総体的に見て，教材で取り上げられたエピソードは，戦後初期においては家庭教師時代からラジウム単離までが中心であり，特に中学校では「努力」「学究心」を強調するラジウム単離過程が重点的に取り上げられた。一方，その他のエピソードは単発的に採られるにとどまっている。昭和30年度前後から中学校教材でもラジウム単離以後も含むエピソードが示されるようになり，昭和40年代の小学校教材への移行で夫人の生涯全体を扱って立体的にその人物像

を描くようになっている。

こうしたエピソードの分布と教材の記述をもとに，各教材で提示されている人物像をまとめたものが〈表４〉である。

〈表４　国語教科書教材における「キュリー夫人」の人物像〉

		努力	家族愛	利他心	学究・向学心	愛国心	夫との協力	夫への愛情	よき母
小学校	①			○	○			○	
	②	○	○	○	○	○			○
	③	○		○	○	○			
	④	○	○	○	○	○	○		
	⑤	○	○	○	○	○	○		
中学校	①				○			○	
	②	○			○		○		
	③		○	○		○			
	④	○			○		○		○
	⑤	○	○	○	○		○	○	
	⑥	○			○		○		
	⑦	○	○	○	○				
	⑧	○			○	○	○		
	⑧’			○	○	○	○		
	⑨	○			○			○	○
	⑩	○			○	○			
	⑪	○	○	○	○	○		○	
	⑫	○	○	○	○				
	⑬	○		○	○	○		○	
	⑭	○	○	○					○

「努力」と「学究・向学心」はキュリー夫人の典型像を示すものであり，戦後初期から近年にいたるまで最も多く提示されている。校種よる偏りも顕著には見られない。ただし，昭和20年代に採録が始まった中学校教材では，ラジウムの発見に関わるエピソードを特化して取り上げた教材（中②④⑥）が見られた。このことが示すように，この時期は，これらの二つの規範がより重視される傾向があったと言える。

一方，「利他心」「愛国心」の提示は校種による違いが見られ，小学校ではほとんどの教材で提示されているが，中学校の伝記型教材では相対的に重視されていない。これらは，小学校で重点的に提示された人物像であると言えよう。また，中学校教材の場合，夫人の利他的言動は家族愛とともに示されており，公共性や人類愛と結びつけられた形では提示されていない。

「夫への愛情」「よき母」といった家庭人としてのキュリー夫人を顕彰する教材は全般的に少ない。その中で，昭和25－27年度に採録された教材（小①②，中①～④）では３編で，そうした人物像が示されている。この時期は，「努力」「学究・向学心」が強調される一方で，よき妻，よき母という家庭人しての夫人像も他の時期より重視されていたと考えられる。こうした家庭人としてのキュリー夫人を取り上げる教材は，昭和20年代後半からしばらく新規に採られなくなるが，昭和30年代後半からの中学校教材で，再度採録されるようになる。

戦後国語教科書において，キュリー夫人は，一貫して努力する人，勉学や研究に打ち込む人という人物像で造型されてきた。そうした努力型の人物像を強調する比重は中学校教材において，より強い。この他に家族愛，利他心，愛国心などの特性も一貫して夫人に付与されるが，こうした要素は小学校教材でより多く提示される。また，昭和20年代中盤では家庭人としての夫人像も示されるが，昭和20年代後半から30年代中盤まではこの点に重点を置いた人物造型は見られなくなっている。昭和40年代に入り，小学校教材として生涯記が中心となると，努力型の人物として特化するのではなく，種々の美徳を取り込んだ人物像が造型されるようになっている。

5．おわりに ―― 戦後国語教科書が描く女性像

本稿では，キュリー夫人を通して，「努力」「家族愛」「利他心」「学究・向学心」「愛国心」「夫との協力」「夫への愛情」「よき母」といった規範が提示されていることを検討してきた。これらは，「夫との協力」「夫への愛情」「よき母」のような女性特有の人物像や，「家族愛」のように相対的に女性に付与されやすい人物像もある一方，「努力」「利他心」「学究・向学心」「愛国心」のように，女性に特化されるものではない人物像も多く見られる。実際，後者の諸規範は，他の男性人物の伝記でも見いだすことができる。しかし，この点にキュリー夫人を通して描かれた女性像が端的に表象されている。

教材が記述するキュリー夫人の言動の特徴は，その男性性にある。困難を意志と努力で乗り越え，ラジウム単離においては「男の仕事」をこなし，亡夫の志を尊重して研究を継続し，傷兵看護のために戦地に出向き，ノーベル賞を受賞する。こうしたエピソードには，夫人が男性と同じように，あるいはそれ以上に男性的に行動していることが示されており，女性でも社会の中で男性に伍して活躍できるのだというメッセージが強く打ち出されている。つまり，女性が男性と同等にふるまうことは可能であり，そうすることで男性と同等に社会へ参入できるという可能性を強調するものとして，キュリー夫人は造型されているのである。このような男女間の同等性に対する強調は，夫妻の協力という点にも反映されている。男女が対等な立場に立つという協力関係を表象するには，男性以上の業績を持つキュリー夫人でなければならないのである。

一方で，そうした男性と同等に社会生活を営むことと同時に，夫を敬愛する妻，子どもへの教育を成功させたよき母としても，夫人の造型はなされている。昭和20年代中盤の教科書が描く女性像は，男性と同等に社会に参入するとともに，それを家庭人としての愛情と両立させることができる人物である。

キュリー夫人を通して描かれる女性像は，女性が男性化し，社会の論理に同調することによって，社会に参入することが開かれるというモデルである。これは，戦後国語教科書のキュリー夫人教材で，一貫して提示され続けているモデルである。一方で，よき家庭人という古典的な女性像は保存されており，社会人と家庭人の両立に女性の理想型を見いだされる場合もある。昭和20年代中盤や昭和30年代後半は，そうした家庭人としての女性像が想定された時期である。女性が男性性を持った社会人となることと，古典的な女性性を持った家庭人であることとの間で揺れながら，社会人となることの可能性を志向するのが，キュリー夫人教材を通して描かれた女性像の特徴として指摘できる。

〈注〉

＊1　以降，各教材は小①・中②のように，校種と番号で表記することとする。
＊2　阪本一郎（1964a） p.68，阪本一郎（1964b） p.78
＊3　たとえば，富塚清は，ラジウムの単離を夫人の功績とした上で，このような精緻さと根気の必要な作業を，「仕事の性質上，こういう科学上の仕事こそ，一ばん女性に向くものであることを，見のがしてはなりません。」としている。（富塚（1952）p.31）
＊4　時期区分とエピソードの設定は，原則として神奈川県図書館協会児童奉仕委員会（1977）を踏襲した上で，筆者の判断でいくつかの修正を加えた。

〈引用・参考文献〉

阪本一郎編（1964a）『読み物による性格形成：適書目録　上』 牧書店
阪本一郎編（1964b）『読み物による性格形成：適書目録　下』 牧書店
富塚清（1952）「女でのピカ一・キューリー夫人」『国民』615号　pp.27－31
神奈川県図書館協会児童奉仕委員会（1977）『子どもの伝記の研究：キュリー夫人について』 私家版
キュリー，E.（1938）『キュリー夫人伝』 白水社

Image of Woman in Japanese Textbooks in Postwar Days

— A Focus on “Madame Curie” —

Shinji IKUTA

The purpose of this paper is to consider a part of image of woman in Japanese textbooks in postwar days by examining teaching materials of ”Madame Curie.” The image of Madame Curie in teaching materials is as follows, ⑴ Effort, ⑵ Love to her family, ⑶ Altruism, ⑷ Desire for learning, ⑸ Patriotism, ⑹ Cooperation with her husband, ⑺ Love to her husband, ⑻ Being good mother. Some of these are manly images, and images of Madame Curie are also manly ones. It shows the image that women can participate in the society in the same way as men. The image of Madame Curie in Japanese textbooks swings between manly image and classical womanly ones.